

傷病と健康からみた通院期間の人口学的分析：2001，2013年

A Demographic Analysis of Average Duration of Outpatient by Diseases and Subjective Health in Japan

別府志海（国立社会保障・人口問題研究所）

高橋重郷（明治大学）

BEPPU, Motomi

(National Institute of Population and Social Security Research)

TAKAHASHI, Shigesato (Meiji University)

E-Mail : beppu-motomi@ipss.go.jp

日本は世界の中で最も平均寿命が長い国の一つであり、特に女性の平均寿命は世界の中で最長である。この女性の平均寿命がどこまで延びるのかは、ヒトの平均寿命がどこまで伸び得るのかを測るものとして日本国内のみならず国際的にも注目され、学術的な関心が寄せられている。本報告では死亡に至る前段階としての健康状態に着目し、特に傷病の種類と主観的健康観を健康状態の変数として扱うことにより、年齢別通院率、主観的健康観・傷病別の平均通院期間について探る。分析手法には、健康状態別の人口割合から健康生命表を作成することが可能な Sullivan 法を用いる。なお、厚生労働省『国民生活基礎調査』の再集計を行っている。

はじめに年齢別通院率について、2001年と2013年の比較から70歳頃までは変化が小さいものの70歳代後半から2013年の通院率が大きく上昇していること、両年次の男女とも通院率は80歳以上になるとそれまでとは逆に低下することが示された。

第二に、男女とも、平均余命および平均通院期間はいずれの年齢においても伸長する一方、通院しない期間は男女とも逆に短縮の傾向が見られた。ただし健康度別にみると、通院中では健康度が「ふつう」の期間が長く、「比較的悪い」期間は「比較的良い」期間よりも若干長い程度だった。他方で通院なしの期間は時系列でみると短縮しているものの、健康度別では「ふつう」の次に「よい」「まあよい」の期間が長く、「あまりよくない」と「よくない」の期間は短かった。

第三に、平均受療期間に占める割合を傷病別に計測した結果、通院では主に高血圧症、糖尿病、狭心症・心筋梗塞が多かった。健康度について、全体と「比較的悪い」を比較すると、特に高血圧症は全体の方が男女・いずれの年齢とも平均余命に占める割合が長く、逆に狭心症・心筋梗塞、その他の循環器系の病気、腰痛症、悪性新生物では、健康度が悪い方が通院期間は長くなっていた。このことから、高血圧症自体は「健康」に大きく影響する傷病であるとは認識されていないとみられる。しかしながら、高血圧症は脳血管疾患や虚血性心疾患、腎臓の疾患等を合併しやすく、特に脳血管疾患は入院期間が長い上に死亡率も高い。したがって、これらの疾患を予防することは、単に生存期間を延ばすのみならず、平均健康期間を延ばすことにもなるだろう。